

月報

<431号>

ケルンボン日本語
キリスト教会
二〇一六年八月二八日発行

恵みの宝

マタイによる福音書二五章一四〜三十節
佐々木 良子

赴任して初めての夏がそろそろ終わり、秋を迎えようとしています。八月は真夏の日差しが眩しく照り付けたかと思うと、急に冷えていよいよ秋かと思う数日が続きました。しかし、九月を目前に最後の暑さを絞り出すように真夏が戻ってきて、天候に振り回されているこの頃です。

このように時は様々な変化していきませんが、私は赴任して以来一貫して「教会っていいな、礼拝を共に献げられるってステキで幸せだな」と、変わらない思いがあります。

それは週ごとの礼拝において、教会の皆さまが与えられている賜物を喜んで、神さまのためにお捧げしているお姿と、又、隣人を尊び、教会を愛しておられる一人一人を目の当たりにして思うのです。僅かしかない教会員メンバーが、お互いを支え、補い合う姿が美しく見えるのは私だけではないと思います。おそらく教会員の皆さまもそのように感じながら日曜日遠くから近くからおいでになつていてると思えます。そしてこのような光景を、誰よりも神さまが喜び微笑んでご覧になっておられることではないでしょうか。それぞれ持っておられる賜物は違いますが、違うからこそ意義深いのです。人はみな、神さまから生まれながらの才能の賜物。タラントンを与えられています。

これは神さまが一方的に恵みとして預けてくださったものです。神さまは私たちが用いることを期待して預けてくださったっており、私たちにってはいかに忠実に用いるかが問われています。

そのことがイエスさまの譬え話として記されています。「それぞれの力に依じて、一人には5タラントン、もう一人には2タラントン、もう一人には1タラントンを預けて旅に出た」(一五節)と、あります。私たちは兎角、与えられた量に目が留まり、人と比較して「隣の芝生」は青く見えて卑屈になったりするものです。然るに、何故同じタラントンを預けにならなかったのでしょうか。

私たちが心に留めないとならないのは、与えられた量ではなく、「何のために、それぞれ違ったものをお与えになったか」ということです。それは、神さまはそれぞれのタラントンの働きを求めておられるのです。5タラントンの者にできる働きがありますが、1タラントンの者しかできない働きもあるのです。それぞれの働きが尊いのです。与えられた賜物・恵みを受け止め、応答して感謝して用いることに期待しておられます。私たちが愛しておられる神さまと愛されている私たちがこのキャッチボールとでも言ってもよいでしょう。

さて聖書によると、5タラントン、2タラントンのそれぞれの僕は預かったタラントンを十分に用いたので主人から「忠実で良い僕だ。よくやった。……多くものを管理させよう。」(二一・二三節)と、褒められただけではなく、昇格の約束まで受けたとあります。一方、1タラントンの僕は「恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。」「賢くください。」「これがあなたのお金です。」(二五節)と記されています。預かったものを減らすことなくしっかりと保管していたのですから、この僕

はきつと主人から賞讃を受けられると期待していたかも知れません。しかし、厳しい言葉で叱責され、持っているものまで取り上げられ、もっと積極的に用いる仲間に与えてしまいました。臆病に自分の安全を第一に考えて用いなかったので。

この僕の根底にあるものは神さまは恐ろしい方であるという思いが支配し、神さまを信頼することがありませんでした。神さまの愛は私たちのありのまま、つまり、5タラントン、2タラントン、1タラントンのそのままの姿で愛してくださっていますから、私たちは与えられたもので精一杯喜んで応答していけばよいのです。空を飛べない人間に対して飛べというように、無茶苦茶なことは決して仰せにはなりません。神さまの愛に「応答しなくてはならない」ではなく、「神さまを喜ばせる者になりたい」という願いが湧いてくる関係が神さまと私たちとの関係です。ですからうまくいっても高ぶる必要はありませんし、失敗しても自分は能力がない、と卑屈になる必要もありません。それでも神さまは養ってくださり用いようとしておられます。

「……わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。」(エフェソの信徒への手紙一章一〇節) 私たちは善い行いによって救われたのではなく、善い業を行うために救われたのです。神さまは絶えず私たちが愛の恵みで満たしてくださり、私たちも常に応答することができるとです。これからも「教会っていいな」と思い続けていけるような教会であることを願っています。

(二〇一六年・八月一四日主日礼拝説教)

思い出

小塩 節

ずいぶん古いことですが、忘れられぬ思い出の二、三を記させていただきます。一九八五年の初夏、ケルン・ボンは輝いていました。アーヘナー池の畔りに繁る菩提樹に白い花が咲き出し、ほのかに甘い匂いが空にただよい、北国ドイツがいちばん美しい季節です。

ある日、ケルン日本文化会館に〇牧師ご夫妻がふらりと訪ねてこられました。初めてお目にかかりました。ほっそりとした〇牧師は、静かな口調でケルン・ボン日本語キリスト教会のお話をなさいます。せひいらっしやいと、一言もおっしゃいません。それに私は、ドイツの社会に少しでも根をおろすためにも、日曜日は地域の純ドイツの教会に出席しようと思っていたのです。でもご夫妻のおだやかなお話を聞くうちに、近くその教会の礼拝にも出てみようと思うようになりまして、次の聖日から三年間ずっとそこに出席させていただくようになってしまいました。

若い〇牧師は、聖日ごとの説教を実によく準備なさり、熱のこもった説きあかしをなさいます。それは私ども心の疲れをいやし、励まし、悔い改めさせてくださるものでした。ただ先生は不思議なことに、いつも入念に用意なされた説教原稿に目をおとし、一度もその目をあげずに原稿を読みあげられる。私も会衆の目をこちらにならない。そこで私はある日の礼拝後、新参者で失礼ながら、恐る恐る「会衆の目を見てお話しになりませんか」とお伺いしてみました。

すると次の聖日、何と先生はずっと顔をあげてお話しになるではありませんか。え、どうしたんだろう。よく見ると、その目の先つまり視線の先はお話のあいだ中じっとある一点に集中して左右にはうつかない。お

やと気付いて、先生のじっと見つめる視線の先をそっと追うと、集会室の最後部にお坐りの奥様の大きな黒い目でした。でもそれから数か月のうちに先生は、会衆の中の何点かに目を移してお話なさるようになりました。日本にお帰りになった先生は数年後、大きなH教会の堂々たる説教者になっておいででした。

ある時、私は循環器の故障からケルン大学病院入院を余儀なくされました。暫くは面会謝絶でしたが、たちまちお風ごに教会員の方々からの、折り詰め純日本風お弁当が差し入れられてきました。情報の早いこと！玉子焼きの美味しかったこと！今も忘れられません。「愛は胃の腑を通して」とドイツ語のことわざがある通りです。そして私は「このいと小さき者のために」ここまでしてくださる方々への感謝に圧倒されたのでした。

ケルン・ボン教会は、幾度もの苦境をのりこえて、福音を正しく宣べ伝えて数十年、確固として守られてきました。この歴史は重いものです。今春には佐々木良子牧師を迎えて、改めて主の教会としてさらに強く守られていくでしょう。(東京・井草教会員)

ドイツ・スイスを訪問して

廣中 佳実

はじめまして。二〇一五年より日本基督教団事務局に務めている廣中佳実と申します。事務局にはいくつか部署があります。総務部・宣教師部・財務部・広報部・教師検定等です。私はその中の世界宣教師部でお仕事をしています。各々委員会が構成されており、世界宣教師部の下には世界宣教師委員会、国際関係委員会、台湾協約委員会、韓国協約委員会、スイス協約委員会、宣教

師人事委員会、宣教師支援委員会が構成されています。

その内のスイス協約委員会は、一九八八年に日本基督教団と、SOAM(スイス東亜伝道会)、SMK(スイス・プロテスタント教会連盟)との間に締結した宣教協約を履行、維持、発展していくための委員会です。日本のお隣である韓国の二教会PNS(大韓イエス教長老教会)、PROK(韓国基督長老会)もスイス教会と宣教協約を結んでいることから、隔年でスイス・韓国・日本で教会協議会を開催しています。今年にはスイス教会がホストとなり協議会を開催しました。その為、七月初頭にスイス協約委員会の委員二名と加藤誠幹事、東京神学大学の神学生と共に、スイスとドイツを出張訪問する機会が与えられました。協議会自体は七月六日〜八日に開かれましたが、世界宣教師委員会から今年四月より派遣されている佐々木良子先生と、ケルン・ボン教会の皆様にお会いしたく、七月二日に日本を立ち、七月三日の主日合同礼拝に出席させて頂きました。当日は礼拝だけではなくStragenfestにも参加することができて、ひよっとすると普段の礼拝とは少し違う交わりができたのではないかと思います。お祭りの後はケルンの街に戻り、佐々木先生とゆっくりお話をすることができました。翌日はシュミット亜弥子姉が特別に時間を割いてくださり、ケルンの中心街をご案内下さいました。

二〇一五年から世界宣教師部で働き始めてから、先輩方のお話、過去の冊子(宣教師の皆様からの報告、各教会からの月報)や、「共に仕えるため」(等)、委員会や、現地に派遣宣教師と教会員の皆様との連絡を情報源にして、教会の様子に想像を膨らませていました。しかしながら、私は仕事上、宣教師の皆様や教会の皆様にも、原稿執筆を御願いすることが多

く、直接お会いしたことがない方々に、毎回一方的に原稿の執筆を御願ひすることに、時折申し訳なさを感じます。それでも、皆様いつも快く引き受けてくださり、内容を拝見すると海外教会の状況や、その土地で神様がどのように働かれているのかを知ることができ、毎回励ましと恵みをもらってばかりです。いつも本当に心からありがとうございます。それで今回ケルンボン教会を訪れた際に藤井兄と尾畑兄に、「原稿依頼」を頂き、喜んでお引き受け致した次第です。

私は在日台湾人二世で、生まれた時から在日台湾教会(救済・東京台湾教会)へ通っています。礼拝は台湾語(閩南語)と日本語(説教通訳のみ)で行われ、毎月第三礼拝には日本の様々な教派の先生を招いて説教をして頂いています。移住者のみならず、留学生、二、三世、国際結婚した方のパートナーや台湾が好きな日本の方が集っています。

日頃「世界宣教とはなんぞや」と思いを巡らしていますが、今回のスイス・ドイツ出張を通して考えさせられました。足りない頭を絞って幾つか整理しました。

世界宣教とは：①その土地に福音がのべ伝えられること、②その土地の福音／恵みを知ること(私が、他者がその土地を知ること)、③その地のキリスト者に寄り添うこと、④現地教会の礼拝に出席すること、⑤外国人が現地で自らの言語で礼拝しているという事実を知らせること(とても励みになる)

世界宣教と考えると、なんだか①のような、大規模なことと捉えがちでした。しかし、例えば②、直接踏み入れるだけでなく、本や分かち合い等を通してその土地で行われた神様の業を知り、周りにそれを伝えることも、立派な世界宣教なのだろうと気付きました。そして⑤、今まで考えつきませんでした、例を挙げ

ると、自分が「日本で台湾語を使って礼拝していること」を、もっと国内外の、教会に繋がる人／繋がっていない方々に伝えてゆくことも、一つの世界宣教なのだ、心と気付きました。台湾にいるキリスト者にとっても、日本のキリスト者にとっても、この事実は励みになるのではないかと想うのです。まさか、自分の思いもよらないほど身近に世界宣教はありました。

いつも月報等を通して、神様がケルンボン教会に与えられた使命や恵みを分かち合ってください本当にありがとうございます。今回は文章からだけでなく、直接皆さんにお会いでき、益々励ましを受けました。私だけでなく、もっと多くの方々に神様がその土地で行う恵みの業を知ってもらおうべく、一緒に小さなことから世界宣教してゆけたらよいと願っています。感謝

(救済・東京台湾教会員／
日本基督教団事務局員)



キリスト者の集いに参加して

谷道 まや

私は、二〇〇四年から〇七年まで三年間ケルンに滞在し、ケルン・ボン教会に出席しておりました。前半は小栗献先生が牧会されていましたが、先生のご帰国後は何人かの牧者が短期間に入れ替わった時期でした。その間、キリスト者の集いは行われていたのでしようが、私の場合、夏は日本文化会館の仕事もあり、日本からの訪問客も多く、一度も参加したことがありませんでした。今年は、ドイツ南部で開催されるということなので、ぜひ参加したいと思い、シュミット亜弥子さんを通して申し込ませていただきました。

シュツットガルトから黒い森の奥に入ったザーベルシュタインの会場での四日間のプログラムは、内容の濃い、充実したものでした。メインテーマは、「み国を待ち望む」。私にとって、み国とは、主の祈りでいう「み国を来たらせたまえ。み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」が唯一、このテーマから思い起こされる言葉です。そして、自分が死んだ後は、神さまの住んでおられる神の国に国籍を移してそこで安らかに暮らすのだろうと、のどかなイメージを持っておりました。

ところが、この集会で初めて知った言葉、携拳(けいきよ)ということが起こって、主が天から下ってこられ、子どもは一瞬にして天に引き上げられ、主と共にいることになること……。(一テサロニケ四・一三〜一八)また、黙示録一九章に出てくる神の統治なさる千年王国について詳細な講義がありました。何人かの方々と話していて、神の国に対するイメージにすい分へだたりがあることに気付きました。終末に対する関心の比重が、教派によっても違つたということにも気づきました。私自身は、終末についてほとんど無知であったと自覚しました。しかし、難解な「ヨハネの黙示録」をさらに読んでみたいと思うようになったことは、収穫です。

ヨーロッパ各地から集って来られた兄弟姉妹とお話をして、日本から遠く隔たった場所でも日本語の礼拝を守る努力や工夫は相当なものと感じました。日本から派遣された牧者が安定的におられるところは幸運ですが、そうでないところでは、いろいろな苦労があるのでしよう。また、配偶者が日本人でない場合、子供の教育や、信仰生活のあり方など、協調する努力が必要です。今回の三泊四日の集会には、約二八〇名の参加がありました。その中には、乳幼児、子供、ティーンエイジャーたちも含まれてい

ます。子供たちも別プログラムで、有意義なときを過ごしたようです。最後の日には、子供たちの成果の発表や、メサイアの合唱もあり、見事なハーモニーを聞かせてくださいました。さすが、音楽の本場です。すべての発表は、パワーポイントで明瞭に表示され、大会の詳細もホームページで検索することができ、主催者であるスイス日本語福音キリスト教会の行き届いた配慮をありがたく思いました。

(東京・阿佐ヶ谷教会員)

◇ 報 告 ◇

七月三日(日)はボン・ヘッファー教会前の通りのバザール(Strassenfest)があり、ボン・ヘッファー教会との合同礼拝後、ケルン・ボン教会も海苔巻き、焼きそば、押し寿司など販売して協力しました。



七月二十七日から三十一日までドイツの Bad Tönning-Navelstein にて開催された第三回「ヨーロッパ・キリスト者の集い」には、約二八〇名の参加者があり、当教会からも佐々木牧師と二名が参加し、共に恵みを頂きました。次年度は宗教改革五〇〇周年を記念して八月三日〜六日、ライプツィヒにて行われます。今からご予定に入れておいてください。尚、佐々木牧師はCS担当委員として既に準備を進めています。共に奉仕を担って頂ける方を募集中です。(全日程ではなく、一部分でも大丈夫です)テーマは「み国を待ち望む」です。準備にあたられている奉仕者のためにお祈り下さい。

◇ 予 告 ◇

九月一七日(土)一時から一七時まで、デュッセルドルフ・ヨハネス教会のエキクメニカル・サタデー

において、日本のことをアピールする機会が与えられました。礼拝をお捧げした後、日本の教会の紹介、ミニバザー、短冊作りなどの楽しい企画を用意しています。

※ 日本製小物の献品を募っています!

場所: Johanneskirche

Martin-Luther-Platz 39, Düsseldorf

特別集会のご案内

私たちの教会を応援するために、キリスト伝道会主催のもとに、はるばる日本からいらしてください。お知り合いの方をお誘いください!

日時 10月9日(日) 14:00
場所 パウル・ゲルハルト教会

説教 深谷春男 師
キリスト伝道会実行委員長・エバンジェリスト 東京聖書学校吉川教会牧師

オルガン演奏 吉本真理 師
国際キリスト教団 代々木教会牧師

ソロ賛美 尾畑秀治兄、尾畑真知子姉
ケルン・ボン日本語キリスト教会員

【礼拝場所の変更のお知らせ】

ボン・ヘッファー教会の改修工事のため、七月一〇日〜九月一〇日の間、リンデンタール地区のパウル・ゲルハルト教会にて礼拝を行います。礼拝時間は通常通り一四時からです。

Paul-Gerhardt-Kirche

Gleueler Str. 106 (Ecke Lindenthalgürtel), Köln

行き方: Neumarkt から14番のバスで Gleueler Str./Gürtel下車



【九月の主な礼拝・集会の予定】

- 九月 三日(土) メアブッシュユ家庭集会 一六時より (藤井宅)
- 九月 四日(日) 礼拝(聖餐式)・おしゃべり会 (パウル・ゲルハルト教会)
- 九月 六日(火) 聖書を学ぶ会 一〇時より(牧師宅)
- 九月 八日(木) ケルン家庭集会 一二時より(シユミット姉宅)
- 九月 一一日(日) 礼拝・祈祷会 (パウル・ゲルハルト教会)
- 九月 一七日(土) エキクメニカルサタデー (ヨハネス教会・デュッセルドルフ)
- 九月 一八日(日) 礼拝・役員会 (ボン・ヘッファー教会)
- 九月 二〇日(火) 聖書を学ぶ会(牧師宅)
- 九月 二五日(日) 賛美礼拝 (ボン・ヘッファー教会)

※ 詳細は牧師までお問い合わせ下さい。

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde
Köln-Bonn e.V.

<主日公同礼拝>

会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
住所: An der Decksteiner Mühle 1
50935 Köln (Lindenthal), Germany
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

<牧師> 佐々木良子 (Pfr' Ryoko SASAKI)
牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
固定電話: 02234-9298792
携帯電話: 0151-2910 6278
Email: r310130s@yahoo.co.jp

<ホームページ>

http://koelnbonn.jp

<振込口座>

IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
BIC: PBNKDEFF